

コメント：変貌する結婚・家族と男女不平等

利 谷 信 義*

本シンポは、出生率低下の原因とされる「結婚離れ」と「晩婚化」の背後にある家族の動きを探求する。企画者が、現代日本の結婚は新家族の形成であり、かつ親世代の家族の拡大・延長であるとして、結婚と親子関係との解明に力点を置いたことは適切であった。

金子報告は、「結婚離れ」の要因とされた女性の高学歴化、規範意識の変化、適齢期人口の男女不均衡などは結婚に直接作用するのではなく、結婚意欲の発生、出会い、交際、婚約という結婚に至る一連の行動のどこかに作用し、結果として結婚現象に影響するという観点から、初婚過程に含まれる行動の時系列変化を観察し、諸要因が影響するメカニズムとその効果とを実証的に解明しようとした。この発想は斬新であり、最近、婚姻と離婚とを、同棲と重婚的内縁をも含めて過程として動的に把握しようとする法社会学の関心とも一致する。世界の家族関係は脱制度化と契約化の方向を辿っており、このような研究が不可欠だからである。将来、両者による実りある共同研究の実現を期待したい。

鈴木報告は、家族・親族規範の構造の全体像に迫る端緒として、夫婦と親子関係に関わる規範の構造、要因分析を試みた。結婚規範については、皆婚主義と伝統的性別役割分担との結合が強く見られ、男性はその規範性の後退に結婚のメリットの減少を感じ、威信の高い職業につく女性はこれと異なる規範を持つこと、セックス規範については、男性の婚外交渉に厳しく、女性の婚前交渉に寛容な傾向が見られること、セックス規範と結婚規範とは相対的に独立していることなど、説得的である。親子規範については、老親扶助志向と生活分離志向との二つの意識が抽出され、男性では世話をする子の立場から高年齢でも生活分離志向が強く、女性の場合には夫と死別した老後を考える親の立場から同居希望が強く見られるという指摘は、高齢化時代の規範意識を示すものとして有意義である。今後は、結婚と親子に関わる規範の交錯関係の解明が期待される。

中野報告は、鈴木報告の結婚規範の分析と関連し、未婚女性の結婚観をそのライフコースの選択度を指標として分析し、晩婚化との関連を解明しようとした。女性のライフコースは、結婚と仕事との二者択一ではなく、両者のバランスをどうするかによって分化するが、理想とされるコースは、すでに社会的定着を見た再就職と、専業主婦とが各3分の1を占め、両立はまだ18.5%であり、DINKS、非婚就業継続は少ないから、ライフコース選択の幅は限られている。しかも再就職と専業主婦とは伝統的性別役割分担を前提とし、未婚女性の独身生活のメリットと抵触する。結婚の不効用が未婚女性に意識されるかぎり、晩婚化に歯止めは掛からないという結論は明快である。

廣嶋報告は、鈴木報告の親子規範の分析と関連し、結婚後の親子の同居が晩婚化の一つの要因となっていると主張する。男性は60%程度親との同居意思をもつが、結婚直後からの同居意思は半減し、女性も夫の親との同居意思を60%弱もつが、結婚直後からの同居意思は3分の1となること、女性が結婚の条件として重視する要素として「相手の親との同居」をあげた者が50%を超え、「相手の人柄」「相手のものの考え方」に次いで3位を占めたこと、女性が自己の親と結婚直後に同居する意思も6.8-9.1%有るが実現していないことなどがその論拠であり、背後に男女不平等があることが示唆される。この点、親との関係が夫と妻とで対等で、住居も双方の親と等距離に近居の形をとりうるため、一人子が一人子を選ぶ最近の傾向の指摘は、将来の親子関係を示唆して興味深い。

以上、諸報告は新鮮な問題提起と説得力ある論証を提供した。私には、その背後に男女不平等問題が潜在していると思える。大きな学問的刺激を受けたことに深く感謝したい。

* 東京大学社会科学研究所長